早稲田大学インクルーシブ教育学会
ニュースレター

2020 年（令和 2 年度）・NO.1

高橋あつ子副会長　挨拶

全国各地からご参加をいただきありがとうございます。休校や自粛など気がめいってしまいそうな時期ですが、「新しい生活様式」ならぬ「新しい研修様式」の下に、いつも以上の参加をいただき心強く感じます。距離が学びの障壁になっていた時代を吹っ飛ばして、会員のすそ野を広げ、日本のインクルーシブ教育が進むことを願っています。本会の授業実践部会や私学部会は、すでにオンラインでの学びを積み重ねておりますのでどうぞ意欲的にご参加ください。

高橋桐子先生紹介　東京大学先端科学技術研究センター特任教授とハワイ大学障害学センター准教授を兼任なさっています。ご専門は人間支援工学。東大を中心に日本国内の大学における発達障害支援のクオリティーを上げようという壮大なプロジェクト**[PHED]**の中心になってご活躍です。本学会でも一昨年「ICT 活用のワークショップ」をしていただきました。桐子先生との関わりの中で一番印象に強いのは、何を言っても「大丈夫よ！」「問題ないわ」「それもできるわ」と全部返ってくる。それは、ICT に強く、どんな障壁も何らかのテクノロジーと「支援できる、発達しうる」という強いパッションで乗り越えてきたからなのだと思っています。今日のご講演が、インクルーシブの理念を自分の中に燃やしていく良い機会になったらと思っています。

記念講演　「インクルーシブ教育の未来像」

【講師】
ハワイ大学障害学センター准教授
東京大学先端科学技術研究センター
特任准教授　高橋 桐子 氏

東京大学 先端科学技術研究センター
http://www.rcast.u-tokyo.ac.jp/about/index_ja.html

東京大学 PHED（フェッド）では、AT も紹介し、AT 紹介のイベントを毎月行っています。**支援機器ライブラリー**
https://phed.jp/

はじめに「インクルーシブ教育の未来像」は、講演の内容からヒントを得て、それぞれがが作り上げていくものであることが確認され、「インクルーシブ教育の意味を再確認する」「インクルーシブ教育のイメージを描き言語化し始める」「次のステップを考え、書きだす」と言う 3 つの目的が示されました。

講演は UDL の枠組みを取り入れて進行していきました。UDL では温かなクラスづくりが大切です。先生自身が、様々な角度から最先端の障害支援の経験と研究を積まれたことがわかる自己紹介で、ウェルカムな雰囲気が作られました。その中で、まだ、日本で LD と言う言葉も広まっていない頃に、「日本では我が子は普通校に通わせてもらえない、しかし、まだまだ学習したらこの子は伸びる」という思いからアメリカに来た二組の親子と出会いを通して、いつか日本で LD のことや障害支援について教員に教えたいという「志」を立てた、というお話しが印象的でした。

導入に、Nearpod.com を使って、コラボ黒板に各々が考える「インクルーシブ教育とは何か？」を書き出しました。Nearpod では、お互いのコメントを見ながら授業を進めることができ、対話的な授業のアプリとして活用できます。参加者からは、「さまざまな意見を見ることができて面白かった」と言う感想もいただきました。

1．インクルーシブ教育の背景

1948 年人権に関する世界宣言　75 年前に、「全ての人への教育」が表明されています。
1994 年　サマランカ声明「特別なニーズ教育に関する世界会議」
◎インクルーシブスクールの基本原則は、困難や違いに関係なく、可能な限りすべての子どもたちが一緒に学ぶべきである。◎インクルーシブスクールは、生徒の多様なニーズを認識し、それに応え、異なるスタイルと学習率の両方に対応し、適切なカリキュラム、組織の配置、教育戦略、リソース使用、地域社会とのパートナーシップを通じて、すべての人に高い教育を確保する必要がある。
2006 年　国際連合の障害者権利条約　第 24 条「インクルーシブ教育システムとは、人間の多様性の尊重等の強化、障害者が精神的及び身体的な機能等を最大限度まで発展させ、自由な社会に効果的に参加することを可能とするとの目的の下、障害のある者と障害のない者が共に学ぶ

仕組みであり。障害のある者が一般的な教育制度から排除されないこと、自己の生活する地域において初等中等教育の機会が与えられること、個人に必要な「合理的配慮」が提供されること等が必要である。

高橋先生は、インテグレーションからインクルージョンに向かって多くの国々が取組んでいることを、法の理念をもってお話されました。日本も、2003 年にインクルーシブ教育が導入され、2016 年に障害者差別解消法が施行されています。日本の状況については、**文部科学省が令和元年（2019.9.24）に出した「日本の特別支援教育の状況について」**をご覧ください。これを見ると、日本には分離的な考えがあることがわかると話されました。

https://www.mext.go.jp/kaigisiryo/2019/09/__icsFiles/afieldfile/2019/09/24/1421554_3_1.pdf

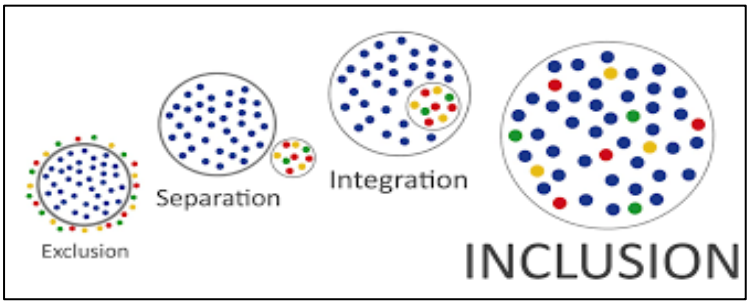
インクルーシブ教育の背景について、**「セパレーションからインクルージョン」**のビデオを観てまとめとしました。

Not all models of education are inclusive -

You Tube

https://youtu.be/xHHTbgvjbxA

URL から、字幕を付け、設定の「字幕」から「自動翻訳」を「日本語」にしてご覧ください。



2．インクルージョンへの壁

高橋先生は、インクルーシブ教育の壁が大きいと思われている要因として、多様な学びの場を保つ分離的な考え方が依然として強かったり、学校の体制や環境が整っていなかったり、教員の態度・理解が低いことも考えられるとしながら、フルインクルージョンが実施されているイタリアでも、教員のトレーニングがまだまだ充実していない、特別支援の教員になりたい人も少ないと話されました。高橋先生の 2013 年の研究によると、日本とハワイで**「インクルーシブ教育に対する教員効力感尺度」**（Sharma et al,2011）を使った調査の結果、インクルーシブ教育に対する指導法の活用の中で、「多様なアセスメント方法の活用ができるか」「レッスン行動に基づく評価の活用ができるか」「個別のニーズに対応する学習課題を計画する自信があるか」について、ハワイに比較して日本が非常に低い結果になったようです。一方、**「インクルーシブ教育についての感情、態度、懸念尺度」**（Forlin et al,2011）を使ったアンケートでは、「すべての生徒に適切な注意をはらえる」「障害のある生徒を教える知識とスキルが自分にはある」については、日本だけでなくハワイでも、教員の不安が高いという結果になったと言う事でした。インクルーシブ教育の先進国でも、教員は同じような不安を抱え、壁を感じていることがわかりました。2020 年の今、同じような調査をしたら日本がどこまでよくなっているか、見てみたいと思いました。

インクルーシブ教育の壁はたくさんあり、壁にぶつかりながら進んでいく、その壁を一人で、また、学校だけで変えていこうと思っても難しい。しかし、コロナ禍の今だからチャンスもあると言う事を、**「カーブカットエフェクト」**を用いてお話しされました。カーブカットエフェクトとは、写真のような、歩道と道路の段差をなくすスロープのことです。バークレーで車いすの学生たちが、夜中にコンクリートを流してスロープを作った話が有名だそうですが、一度作ってみると車いすだけでなく、自転車、バギー、スケートボード、全盲の方も、みんなが使えるスロープになった。このようなもののことを、ノースカロライナ州立大学のロナルド・メイス博士が提唱した、「**ユニバーサルデザイン**」と言いますが、もともとは障害者のために作られたものが、みんなが使えるものになる、それを「カーブカットエフェクト」と言うそうです。今、リモートラーニングで同じことが起きているのではないか、障害のある人にとってオンライン学習はずいぶん前から行われていたが、今、障害のない人にとっても役立つことが分かりました。今まで教室で使えなかった iPad や支援機器も、これからは、同じように持ち込みが当たり前になりつつあります。この緊急事態をチャンスとして、音声読み上げソフトなどの支援機器も U.D.L のオプションとして生かしていってほしい、と話されました。

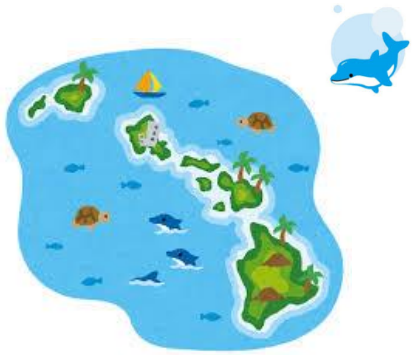
3．インクルーシブ教育のツール

音声読み上げ等は、今、簡単に取り組める支援機器です。ツールの活用については、ハワイの高校 1 年生を対象として 10 週間、デジタル教科書を音声読み上げソフトを使って学習した研究データを基にお話しされました。フレームワークは、「音声読み上げソフトを使うと読解力と語彙力が向上し、さらに、その向上によって、学びに向かうモチベーションも上がる。」というものです。研究結果は、読み上げソフトを使用している生徒の方が使用していない生徒に比べ、リーディングレベルが優位に高くなった、という結果になりました。

さらにこの研究の中で、特に読解力が上がった生徒と中くらいの生徒について分析しました。すると、読解力が上がった生徒は、支援機器の使い方を把握し、意義のある使い方ができていたことがわかりました。あまり読解力が上がらなかった生徒にとっては、支援機器がヘルプフルではなかっただけでなく、音声読

み上げの声が耳障りだった等の感想もあげられました。読み上げソフトを「また使いたい」と答えた生徒は、障害のある生徒とリーディングレベルが中間にあった生徒たちでした。リーディングレベルが低い生徒は、「また使いたくない」と答え、リーディングレベルが高い生徒にとっては、音声読み上げは普段は必要ないという結果になりました。リーディングが少し向上した生徒にとっては、とても必要なツールでこれからも使用したいという生徒がほとんどでしたが、リーディングが変わらなかった生徒たちは、どのように使用したらいいか把握できていない生徒が多かったと言う事です。つまり、ツールだけ与えれば誰でも読解力が伸びるわけではなく、生徒自身が意識をして必要性を感じることが大事になると言う事です。そして、教師の考え方によっても生徒の有用感にちがいがあり、教師がニーズアセスメントをして、必要な生徒に与える、必要のない生徒は使用しない。また、ツールを有効に活用できるように指導する必要もある。ツールの使用方法を教えれば、子どもたちは持続して使いたくなるし、ICT を使用したい時に使えるようになる、と言う事でした。

重要なのは、インクルーシブ教育とはただオプションを与えるだけではだめで、しかし、オプションを与えるところから始めることが必要と話されました。



そのために、ニーズアセスメントがとても大事になります。どんな生徒が自分のクラスにいて、その生徒たちの読解力がどんなものか、ネット環境も把握する必要がある。また、どのようなカリキュラムを導入できるか、トレーニングをどうするかも考えていく等、このような「環境・生徒・カリキュラム・リソース」についてのニーズアセスメントをすることが、インクルーシブ教育に向かう次のステップになっていく、とまとめられました。

高橋あつ子副会長コメント

UDL やインクルーシブ教育と言うと、気になるこぼれそうな人に何をどうあてがうかと言うことに行きがちなのだけど、「みんながいろいろに学べる環境を整えることで、中間層が伸びた」といった研究に注目していきたい。まだまだエクスクルーシブな日本の現状が散見される中で、そのことについてどう自分の学校でインクルージョンを進めていくかと言うことを、時々再確認していきたいと思いました。桐子先生が様々な問題提起をしてくださいました。それ受け止めてそれぞれのフィールドで実践を広げていただけたらと思います。

本田恵子会長謝辞

ツールを与えたら、なぜパフォーマンスが上がったのか？ツールを与えても上がらないのはなぜか？脳科学的に理由がある。そこを見ていく必要がある。子どもの脳に一番ストレスが少ない状態で最大の学びを上げる方法を見つけることが大切。例えば、ディスレクシアの子どもにとって、課題がすべて鉛筆を持って書く課題では、どんなに高い関心・意欲で課題に向き合っても、パフォーマンスだけを測ったら 0 点になってしまう。 桐子先生が仰った「環境整備」について、教師が子どもが学校に来やすい環境整備をしているか、振り返ってほしい。子どものニーズがある、法律もある、合理的配慮もある、権利もある。でも、周囲と違うことを享受できる環境を教師は作っているのか？新しい学習指導要領では、思考力・判断力、表現力、そして学びに向かう人間性を育てることを重視している。なのに、従来通りの知識だけを重視した指導をしていないか？何を学ばせたいか、どんな力をつけたいか、それが教員の側にあってはじめてツールが生きる。合うツールを UDL で選んであげられる、子ども自身が選べる。教師が子どもの脳の状態、認知の状態、その子のストレスの少ない学びの状態を分かった上でインクルージョンをしていってほしい。

「インクルーシブ教育の未来」と言うテーマだったが、インクルーシブ教育の「現在」のように思われた方も多いのではないか。つまり、あたりまえのことが当たり前にできていないと言う事。もう一度原点に立ち返って、教育って何だろう、学習って、子どもが来たくなる学校ってどういう学校だろう、学び合いができる教室ってどういう教室だろうと考えてみたい。「インクルーシブ教育の未来」を一言で言ってしまえば、子どもが学ぶストレスが少なくて、楽しくて、みんなが行きたいと思える学校を作っていくことかと思う。それは、先生自身が行きたくなる、子どもに会いたいと思える教室であり、子供と関わりながらエネルギーが補充されるような学校、そして教室にしていってほしい。

今回 82 名の参加があり、一緒に学び合いたいと言う多くの方の思いが伝わってきます。私学部会や授業実践部会の活動も、研修会も続けていきます。学びに来るのではなく、「学び合いの会」なので、良い取組をみんなでシェアし合いながら進めていきたい。この状況は 1 年続くと思われるが、学びを止めたくない思いでいます。多くの会が休会する中で、「否、こういう時だからやろう！」という思いです。今後も多くの方のご参加をお待ちしています。

参加者のご感想やご意見

- 改めてインクルーシブ教育の歴史を振り返り、これからの進展に思いを寄せることができました。学校再開にあたり、「生徒が明日もいきたいなあ」と思える学校にしていかなければ、と気持ちを新たにしました。
- お話の中で、「ただ多様なオプションを与えるだけではいけない、ニーズアセスメントをする必要がある」とのお話がありました。学ぶ道具や手段を考えるのに必死で、その先や子供本人の状況を見失わないように気をつけなければいけないと思いました。
- ツールを利用すると、モチベーションが上がり、読解力もついた児童は、ツールがなくても、モチベーションを高く維持できる点や、ツールが合わなかった時、そこから何がアセスメントできるのか、代わりに何が必要なのか、ツールの先に見えてくるものが大切だと感じました。
- インクルーシブ教育の基本に立ち返ることができました。まずは教師が活用の仕方を学び、使いこなせるようにしていかなければならないと改めて感じました。タブレットの配置が目的にならないよう、校内の研修など充実させていきたいです。
- インクルーシブ教育の日本の現状を知ることができました。学校の中でも、職員間の温度差があることにずっと違和感を持っていました。しかし高橋先生のお話を聞いて、やはり仕方のない部分もあるのだと、残念に思う一方で、周りの方々に少し優しい気持ちを持てるような気もしました。自分ができることを学び続けて、良いチームを作りながら、子どもたちの支援・指導にあたりたいとますます感じました。
- UDL は、指導技術に注目しがちでしたが、「親和的なクラス」という土台がまず大切だとわかりました。また、高橋あつ子先生が「桐子先生は、どんな相談でも 大丈夫と答える」とおっしゃっていたことが印象的です。通級担任として、生徒にも教員にも保護者にも、そんなふうに答えられる支援者であるために、もっともっと勉強しなければならないと思いました。ありがとうございました。
- カーブエフェクトという言葉が印象に残りました オンラインにより、学会に参加できたことは、地方に住む者としてとてもありがたかったです。同時にコロナ禍における学習に参加する権利についても、提供する側としての責務を再認識させられました 。
- インクルーシブ教育について、知人から紹介され、これから学び始めようと思います。本日のお話は基本的な内容で、初心者にとってわかりやすかったです。Separation から Inclusion への移行が特に納得感がありました。コロナ感染拡大防止のため、様々な点で自粛せざるを得ませんが、本田先生はじめ事務局の皆様の「学びを止めない」という高い志が伝わってくるようです。これからもよろしくお願いいたします。

インクルーシブ教育学会としては、初めての ZOOM での研修になりました。このような多数のご感想の他にも、事務局への労いや運営へのご意見もいただきました。ありがとうございました。

➢ 講演のはじめに、高橋桐子先生が三つの目的を話されました。それは「インクルーシブ教育の意味を再認識する」「インクルーシブ教育のイメージを描き、言語化し始める」「次のステップを考え、書きだす」と言うものです。お話をお聞きして、皆さんは、未来像を描くことができたでしょうか？
今回、早稲田大学インクルーシブ教育学会の若手ホープ、事務局の小泉菜緒さんに、小泉さん描く「未来像」の寄稿をいただきました。

「私のインクルーシブ教育の未来像」　早稲田大学大学院　小泉菜緒

新規入会の皆様、初めまして。継続の皆様、ご無沙汰しております。インクルーシブ教育学会事務局の小泉菜緒と申します。普段は、当学会の会長でもある本田恵子教授の研究室にて勉強中であり、修士論文のテーマにインクルーシブ教育を設定しております。この度ニュースレターに寄稿する機会を頂けましたので、少しだけ私の考える「インクルーシブ教育の未来像」の中でも特に、「今後どのようにインクルーシブ教育が進んでいくのか（進む可能性が高いのか）」について、お付き合いいただければ幸いです。

1. 特別支援教育との関連性

日本のインクルーシブ教育の展望を考えるときに基盤となるのは、やはり文部科学省の資料になります。文部科学省の資料を読んでいると、「インクルーシブ教育のために特別支援教育を進める」という”矛盾”とまず向き合わなければいけません。

文部科学省は、インクルーシブ教育の定義を「障害の有る者と無い者が共に学ぶ仕組み」としています。つまり障害を持つ子供たちが、その子に合わせた教育を行うためとはいえ、特別支援学校や特別支援学級、通級などと言った分離された環境で教育が行われる機会は、インクルーシブ教育と逆行しているのです。重要なことなのでもう一度言います、特別支援教育はインクルーシブ教育と逆行しているのです。しかしながら、文部科学省がインクルーシブ教育について方針を出した 2012 年より、現在に至るまでずっと特別支援学校でも特別支援学級でも、クラス数・生徒数は全て増え続けています。数字だけで見れ

ば、文部科学省が述べている「インクルーシブ教育のために特別支援教育を進める」ということは推進されていますが、これでは、先に挙げた矛盾点（分離教育）をも促進しているように考えられます。

ところで文部科学省は、この矛盾に気付いていないのでしょうか？　現在、文部科学省が公開している資料を読む限り「特別支援教育を推進することがインクルーシブ教育の実現につながる」、つまり矛盾しているとは思っていない、というのが私の見解です。この背景の１つには、特別支援教育を含む現在の日本の教育を大きく変えたくなかった、あるいは変えられなかったことが挙げられます。変える気がなかったのでは？という考えが頭をよぎりもしましょうが、「変えた時の先生方の負担を考えれば踏み切ることができなかった」というのも要因の１つに有るのではないかと考えています。

かといって、何も変わらなかったわけではありません。日本のインクルーシブ教育のゴールを「共生社会の実現」とし、社会に出たときに障害の有る人も無い人も共に生きていけるようにするために、現行のシステムでどのようなことができるかを考えた結論が、「交流や共同学習の推進」であり「多様な学びの場の提供」でありました。……つまりは、学校教育で障害のある者がそれぞれ適切な場所で適切な教育を受けることが、共生社会につながると考え、それが特別支援教育の推進につながったということです。私が今回何を１番言いたかったかというと、「日本において現在特別支援教育に携わっている人は皆、インクルーシブ教育を推進している！」ということです。

「自分の学校では誰も何も変えられない…」「いったい何から手を付けていいのか…」と悩む先生方の何人もの声を聞いてきました。でも、先にもあげたように、特別支援教育を推進していき、社会に出たときに「共に生きていける」ちからを子供につけること、それが何よりもインクルーシブ教育の推進につながっていると私は考えています。

2. インクルーシブ教育の今後

現状のインクルーシブ教育の背景が分かったところで、今後日本のインクルーシブ教育がどのようになっていくかについて考えてみました。上記のタイミングで大きくインクルーシブ教育に踏み切ることはなかったことから、今後文部科学省の方針で大々的にインクルーシブ教育が推進されることは、かなり難しいと考えられます。それこそ、特別支援教育が資金面や大きな事件等が起きて大々的に崩壊でもしない限りは。そう考えると、今後インクルーシブ教育は実際の学校現場で行われているインクルージョン・特別支援教育が、少しずつ広まっていく＆高まっていく、というのが現段階での私の考えです。

最後に恐縮ですが、私から１つお願いがあります。日本の“インクルーシブ教育”に携わる皆さんに、自分の実践が「子供の共生社会につながっているか」を、振り返ってほしいのです。そこが、特別支援教育か、インクルーシブ教育なのかの重要な軸なのではと、思っているからです。

ここまでお付き合いいただき、本当にありがとうございました。今後、インクルーシブ教育が、ご自身の実践が、思うように進まない、どのようにすればいいのか分からないと悩む時があるかと思います。そんな時には、このインクルーシブ教育学会で学び、話をし、一緒に「未来のインクルーシブ教育」について考えていく、そんな学会に一緒にして行けたらと思っております。今後とも、どうぞよろしくお願いいたします。

最後に･･･高橋桐子先生からの、レッツ　トライ！

１．３０分間マウスを使用しないで
キーボードだけでパソコンを使用してみよう！

２．音声読み上げ（Text to Speech）を使用して Word やウェブサイトを読んでみよう！

https://text-to-speech.imtranslator.net/speach.asp

３．オンライン音声入力や音声認識アプリ・ソフトを使用して、メールやメモを書いてみよう！

https://dictation.io/speach

４．音声解説で映画を見てみよう！（アナと雪の女王）
https://www.youtube.com/watch?v=O7j4 aP8dWA

５．バリアフリー単語を覚えよう！

https://mainichi.jp/universalon/ect/key.html

６．自分のウェブサイトのアクセシビリティーをチェックしよう！

https://wave.webaim.org